慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「人口論」批判（下）
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.5 (1923. 5) ,p.751(79)- 780(108)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230501-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

へた手紙は彼が「雪と花崗石」の觀察に熱中してゐて極めて多忙な生活を營んでゐる樣を告げる(Cf. E. T. Cook—The Life of Ruskin, vol. I, pp. 129-130 又 E. T. Cook は一八四四年の同地に於けるラスキンの日誌を載せて彼の生活を窺ふ一端としてゐる、Library edition, vol. III, pp. xxv-xxvii 又此時彼には多少の詩作もあつたが、—例へば Walk in Chamouni の如き、——同地の風景や其の印象を寫すに於いては寧ろ手紙——例へば Rev. W. L. Brown に與へた——の中に眞のラスキンが現はれてゐる。然かも其が軈て Modern Painters の中に纒められたのである。(Cf. E. T. Cook, op. cit., p. 138)

註　一八四四年三月十日附の O. Gordon 宛の手紙にラスキンが Modern Painters の第一卷を書くに至つた動機と其の計畫に就いて吾々に詳細を知らしめる。以下其の一部を抄出すれば次の如くである。

『……一昨年の夏——ゼネヴァに滯在してゐたある日曜日の事を憶ひますが——Royal Academy の評論を載せた一紙をロンドンから受取り其れに就いて私は非常に奮慨しました。其日の午前一教會で、誠に奇妙な事ですが、聽て來らんとするものに就いての私の決心は全部、やらうか止さうかと云ふ事が間遠もなく常に教會できめられるのです、私は連續の間に凡べてを計畫するのですが、私はパンフレットを書いて批評家を追り込めてしまおうと決心したのです。月曜日には Chamounix へ赴き、火曜日は朝四時に起床して八時迄にパンフレットを書いて了ふと思つたのです。で仕事に取り掛つたのですが旭日が Dome du Goûté の上に映り初めたので　落着いて仕事が出來ず——散歩をしようと外出しました。水曜日にも同じ事が起つたので雨降りの日迄パンフレットの仕事を延ばす事にしました。所が雨天の日が仲々來ない——その内に到々書き始める前に一時間や二時間では消化(コナ)しきれない程の材料が集まつてしまつたので家へ戻る迄でパンフレットの計畫を延ばす事になりました。ラインを下るみちすがら私は常に構想にふけてゐましたが、美術上の問題の論證は思つてゐた程容易な業でない事がわかつてパンフレットが一卷の書物にと變りました。所が一卷が中半も纒まらぬ内にヒドラの樣に三つの頭に殖えて其の頭一つゞつが一卷の本となる事になりました。斯樣に規模を大きく企てなくては到底何にも出來ないと云ふ事がわかつたので愈々此のヒドラの頭の角をつかまえて、風景美術に關する完全な論文を書かうと決心しました。』(Library edition, vol. III, Letters on the "Modern Painters." p. 666.)（更に一の計畫に就いては Library edition, vol. III, pp. 680-684, Appendix V.參照）

斯して彼はライン、フランダアスを經て Herne Hill の自宅へ歸つて熱心に Modern Painters の第一卷を書き始めた。

此年の秋十月、ラスキン一家は Herne Hill の家を引き拂つて Denmark Hill の宏壯な屋敷へ移つた其の轉居の顚末や新しい屋敷の廣い事風景の佳い事等は彼の自叙傳第二卷第七九節以下並びに第八章全部に描れてゐるが併し此の新居に於けるラスキン一家の人々は『以前程に幸福でなく又打ち寛いだ感は毫も無かつた』一八四三年から一八四四年の大陸旅行前迄の記錄は上記の第八章並びに第九章(Modern Painters 出版の影響に就いて語つたもの)を除いては自叙傳中極めてその記錄に乏しい。第八十二節の一頁が僅に其の概略を記錄するのみである。併し一八四二年の冬から一八四三年にかゝる期間は、當時の美術界、文學界に一大波瀾を引き起さしめた、彼の生涯中最も特記せらるべき期間である。

以下『近世畫家論』第一卷の發行と其の影響、更にラスキンの思想の發達とに就いて語らう。

「人口論」批判（下）

津田誠一

九

マルサスは、「貧民の貧民たる原因は貧民自身に存し、隨つて其境遇改善の手段は彼等の掌中に在りて他の何人の掌中にも在る事無し」と云ひ、現存社會組織の弊竇を否定し富者階級の救

貧責任を解除し、道德的抑制を以て貧者のみの戒律に歸してゐる。乍併、生產の三要素たる土地資本勞働の間に完全なる融合の存する社會に於ては、勞働に對する機會均等なるに依り、各個人の貧富は正確に各個人の責任たる可きも、該三要素が夫々歸屬する所を異にし、然も利潤を以て其樞軸と爲し、唯是に依つてのみ回轉する所の資本主義的生產組織に於ては、個人の自由競爭は單に法律上の名目に止まり、經濟的には勞働階級は常に資本階級に隷屬し、且つ貧者の勞働は不斷に富者の搾取する所となる事情有るを以て、貧富の懸隔愈々擴大せられ、然もそは決して個人の勤勞、或は勤勞心の程度に比例してはゐない。故に貧民の貧民たる原因は單に貧民自身に存するにあらず、更に大なる禍因は寧ろ經濟組織の根抵に潛在せりと云はざるを得ぬ。然も救貧其他の適當なる緩和手段を實施する時は如上の弊害を若干輕減し得可きも、マルサスは斯かる企圖にも亦左袒を躊躇してゐる。隨つて彼れの論旨に從へば富者が其本能の不羈の充足に依つて產出する多數の子女は、其拱手搾取して得たる富に依つて安全に支持せられ、富者は財寶と子寶とを併有して愈々繁榮する一方に、貧者は終生貧困の脅威の下に唯自己一身を維持するに孜々として、溫暖なる爐邊に家族團欒の怡樂の如きは遂に之を享受するの時無きか、或は一旦之を享受するも不斷に之を喪失す可き恐怖に萎縮しなければならぬ。こは明に公正の觀念に背戻するものと云はなくてはならぬ。

更に實際的見地より省察するも道德的抑制を以て貧者にのみ强ゆるは至難である。蓋し豐富なる財貨と閑暇を有し藝術に思索に高尙なる精神的快樂を追求し得る上流社會に於ては、先見と明智に依り假に道德的抑制の必要ありとするも、之を恪守する事は或は比較的容易なる可きも、下層社會に於ては時間的に將た經濟的に何等高尙の趣味を涵養して鬱を散ず可き餘裕を有せざるが故に、不斷の貧苦より生ずる自棄、狹屋に群居する弊等諸般の原因と相俟つて勢ひ兩性間の過失に陷り易き事情が有る。固より過失其ものは是認する能はざるも然も心有る者の涙無しに叱責し能はざる所である。況や一方に於て富貴に奢る人々が何等拘束無く淫佚放逸に耽りて赧然恥ぢざる惡風を示し乍ら、獨り社會上の弱者たる貧しき人々にのみ所謂道德的抑制を强制するは不公正にして且つ不可能と云はなくてはならぬ。若し修養無き、或は修養の餘裕無き貧者に、生存資料の逼迫を理由に道德的抑制を要求す可しとせば精神的に向上せる、或は向上の餘裕を有する富者に對し、社會に惡風を垂示するを理由に、かゝる意味に於る道德的抑制を要求するのが更に公正の道では無い乎。

固より此種の難詰に對する一應の辯解はマルサスの所說の中に散見しないでは無い。私は先に彼れの私有財產制度擁護、家族制度維持、並に男尊女卑是認等の諸論旨が悉く其論據を道德的抑制の奬勵に置き、且つ其根柢に於て最大多數の最大幸福を人類行爲の基準と爲す功利主義的倫理觀に發生せる事を述べた。約言すれば彼は生存權或は幸福追求權無き現存社會制度に於ては貧窮慘禍が一部の民衆を迫害するも、一旦之を救濟せんとして生存權或は幸福追求權を許容する時は、各人の放逸なる本能充足を促進し爲に生ずる害惡は社會の全般に蔓延せざるを得無い。即ちそれは現存少數者の痛苦を比較的輕減する代りに多數の困窮者を續生せしむる結果となり、遂には全民擧つて人口の壓迫に懊惱す

る悲境に沈倫す可きを以て、幸福の數量を第一義とする功利の原理に依る時は現存制度を以て假令完璧ならざるまでも、比較的最善のものと認識せざるを得ないと云ふのである。乍併、假に功利主義を以て道德の指標とするも、斯の如きは貧窮者が社會成員の僅小なる部分を占むる時代に於てのみ承認せらる可き議論で有つて、現今に於ては到底成立するを得ない。蓋し往時單に國民の從屬概念に過ぎざりし無產者階級なるものが、今や國民の絕對多數を包容する程に激增せるは各國經濟學者の統計の明示する所である。果して然らば最大多數者が不斷の困窮に苦惱し、一方最少數者が極度の快樂に耽溺し然もかゝる懸隔を日と共に益々擴大せしむるが如き制度組織は到底最大多數の最大幸福なる理想に適合するものと云ふを得無い。寧ろ過剩なる少數者の富を以て多數者の過大なる貧苦を輕減する事が功利の原理に妥ふ所以では無い乎。

畢竟マルサスが貧窮の原因を貧者自體に歸し、隨つて又道德的抑制を貧者のみの戒律に歸するも止むを得ずと思惟せるは、彼れが資本主義經濟組織より發生する弊害を正確に洞見するを得ざりー爲である。そは彼れと反對の立場に立ちて、然もゴドヰンの如く空想に逸走せざる科學的社會主義の鼻祖 Karl Marx の所說を省察すれば自ら闡明せられるであらう。

十

Marx に從へばマルサスの「人口論」は其最初の態樣に於ては先哲の所論を皮相的に蹈襲せる以外、彼れ自らの創見に成る章句は一として包含してはゐない。「此パンフレットの惹起せる偉大なる感激は專ら黨派的利害より生じたのである。佛蘭西大革命は夙に英國に於て情熱的擁護者を見出してゐた。然るに十八世紀中に徐々に作り上げられたる此「人口論」は、斯く一大社會的危機の最中に於て、聲を大にしてコンドルセイ等の所說に對する的確なる解熱劑として宣言せられたのである。それは人類進步に對する一切の願望の偉大なる破壞者として、英國の寡頭政治の歡呼を以て迎ふる所となつた。此成功に痛く驚けるマルサスは次いで淺薄に唯蓄積せる材料を其著に詰込み、更に新奇なる、然し自ら發見したので無く唯蒐輯したに過ぎない材料を追加する事に從事したのである」。（Marx:Capital Untermann's. Trans. Vol. I. PP. 675-676. note.）。

斯く Marx が「人口論」を非議する所以は畢竟先天的範疇としての人口の原理を否定し、そは唯或る時代或る民族に限定せられたる歷史的法則に過ぎずと思惟する故である。隨つて人口過增の傾向より生起する憂惧も、彼に從へば唯現存資本主義的經濟組織にのみ特有なる現象で有つて、一旦社會組織に變更ある時は此現象も當然滅失す可きものである　彼は其理を其著資本論第一卷第廿三章「資本制蓄積の一般法則」の中に三段に分つて評論してゐる。

彼は資本を價値增殖行程上より二種に區分する。第一は可變資本で勞銀として支拂に供する資本部分である。其可變と稱する所以は、資本の此の部分は所謂勞働の搾取を演じ自分自身の等價と並にそれ以上の超過價値即ち餘剩價値とを再生產するものであつて、更に此餘剩價値自身も亦變化し得る性質を有するからである。第二は不變資本で勞銀以外一切の物件、例へば機械、建物、原料、助成料等に轉化せらるゝ資本部分である。其不變と稱する所以は勞銀と異り生產行程に於て何等其價値の大いさを變更しないからである（Marx Op. Cit. Vol. I. PP. 232-233）。

扨て第一段に於ては右の資本組成に變化無き時、換言すれば一定量の生産機關即ち不變資本を運轉するに常に同一量の勞働力を必要とすと假定し、此場合に於る資本の增殖が勞働者階級に及ぼす影響を研究する。明に斯かる事情の下に於ては資本の增殖と正比例に勞働の需要並に勞働者の生存基金を增進す可きが故に、勞働階級は最も有利なる狀態に置かれる。即ち彼等は彼等自身の勞働に依つて産出せる産物中、從來よりも一層大なる分け前を勞銀の形に於て取戻す。隨つて其境遇は自然改善せられる。然るに此勞銀昂騰は一面に於て勞働者が資本家に給付する所の不拂勞働の分量減少、換言すれば其生産する餘剩價値の中資本家に搾取せらるゝ分量の減少を意味するに外ならぬ。而して此分量減少は決して資本主義生産方法の特性を危險ならしむる限度にまで達し得るものでは無い。畢竟

資本蓄積に基く勞働價格の昂騰は、左の二個の場合の何れかに關聯する。

（一）、勞働價格の昂騰が資本蓄積の進行を妨げざる爲に、其昂騰を繼續する場合。

（二）、勞働價格の昂騰が利潤の刺戟を鈍らし、其爲に資本蓄積が緩漫となり或は減退する場合。

今第一の場合に關しては多言の要は無い。第二の場合に於て資本の蓄積は縮少し、其縮少と共に縮少の原因、即ち資本と搾取す可き勞働力との間に存する不均衡は消滅する，勞働價格は再び資本の價値增殖欲に適應する水準にまで——此新水準が勞銀昂騰開始以前の舊水準に比して高低何れなるかを問はず——低落する。斯くて資本主義的生産行程の機械的作用は其れが一時的に創造せる障礙を自ら撤去するのである。

爰に於てか吾人は知る。右の第一の場合に於て勞働力又は勞働者人口の絶對的或は相對的增加率の減少が資本を過剩ならしめたので無く、反對に資本の過剩が搾取す可き勞働力の不足を生せしめたのである。又第二の場合に於て勞働力又は勞働者人口の絶對的或は相對的增加率の增大が資本に不足を告げしめたので無く、反對に資本の相對的減少が搾取す可き勞働力或は寧ろ其價格を過大ならしめたのである。然るに此現象を說明して一の場合には勞働者數の過少に歸し、他の場合には勞働者數の過多に歸せるは、是れ冠履を顚倒せる經濟學者の錯覺である (Marx: Op. Cit. PP. 671-680)

第二段に於て Marx は資本の蓄積並に是に伴ふ集中の進行中に於て、可變資本部分が相對的に減少する場合を考究してゐる。前段の如く資本の技術的組成に何等の變化無くして資本蓄積の行はるゝは勞働者にとり最も有利なるも、資本主義的生産行程の特徵として永く斯かる狀態に停頓するを許さない。必ず資本中の可變部分が不變部分に對して減少するに至るものである。

蓋し資本家が可及的多大の利潤を收受する爲には其使用する勞働者の勞働より可及的多量の餘剩價値を搾取しなければならぬ。此目的に適應するには唯二個の手段が有る。第一は勞働時間を可及的延長する事である。此手段に依る時は Marx の所謂絶對的餘剩價値を增大する事が出來る。乍併それは勞働法案の進步、勞働者の團結等の社會的事情に依つて文明の發達と共に漸次其作用を制限せられる。爰に於て第二の手段たる勞働生産力の增進、即ち一定時間內に從前よりは多量の價値を産出せしむる事を考案する。此手段に依る時は Marx の所謂相對的

餘剰價値を增大する事が出來る。然るに勞働生産力を增進するには資本中の一層大なる部分を生産機關に投ずるの必要あり、又斯くして勞働生産力增進すれば原料の消費隨つて增加する等の事情に依り結局(A)不變資本部分の相對的增加は勞働生産力增進の必然的條件であり、(B)不變資本部分の相對的增加は勞働生産力增進の必然的結果となるのである。約言すれば資本蓄積の增進せるに隨ひ右の如き性質の資本主義的生産方法は發達し、逆に此生産方法の發達するに隨ひ資本の蓄積は增進する。此兩個の經濟的要素は其相互に與ふる刺戟の複比を以て資本の技術的組成に變化を生ぜしめ、此變化に依つて資本の可變部分は其不變部分に比し不斷に益々縮少する。此變化は單に追加資本に於てのみ行はるゝにあらずして、舊資本も亦時到れば其舊態を更新し追加資本同樣に、從前より少量の勞働を以て從前より多量の機械及び原料を運轉し得る完成せられたる技術的形態に生れ代るのである。斯くて其勞働者に及ぼす影響如何と云ふに、可變資本即ち勞銀として支拂に供せらるゝ資本部分が相對的に減少するのであるから、蓄積の進行中に形成せられたる追加資本は其大いさに比し益々僅少の勞働者を吸引し、同時に他方に於て新たに變化したる組成を以て周期的に再生産せらるゝ舊資本は、從前其使用したる所の勞働者を益々多く驅逐する結果となるのである(PP. 681-689)。

更に第三段に入つて Marx は前段の研究を繼承して有名なる産業豫備軍の說を樹て、資本主義的經濟組織に特有なる相對的過剩人口の眞相を摘發する。即ち既述の如く總資本の加速度的增大に伴ひ、且つそれ以上の急激なる加速度を以て促進せらるゝ可變資本部分の斯かる相對的減少は、却つて反對に表面上恰も勞働者人口の絕對的增加、換言すれば勞働者人口が其雇傭手段たる可變資本よりも常に一層急激に增加せるかの如くに見えるのである。然し實際は資本主義的蓄積そのものが絕えず自己の能力及び範圍に正比例して勞働者人口の相對的過剩を造り出すのである。換言すれば資本の平均的膨脹欲に適應する以上の過大なる人口、即ち人口過剩を作り出すのである。

更に如說の勞働者人口の相對的過剩は啻に資本蓄積の必然的結果である許りで無く、同時に其必須條件である。それは恰も資本が自己の費用を以て養成せるかの如くに全く絕對に資本に歸屬する所の、自由に處置し得る産業豫備軍を構成するのである。それは現實の人口增加とは無關係に、資本の膨脹欲の變動に應じて何時にても搾取に委す可く準備せられたる一群の人間材料を作り出すのである。資本主義的生産は決して人口の自然的增加が供給する所の、自由に處置し得可き勞働力分量を以て滿足し得るものでは無い。それは自己の自由活動の爲に、此自然的限度とは無關係なる産業豫備軍を要求するのである。斯くて全體として通觀する時は、勞銀騰落の一般的運動は此産業豫備軍の伸張收縮に依つて專ら支配せられ、此伸縮は又更に産業循環の周期的變化に應當するのである。隨つて勞銀の騰落は勞働者人口の絕對數の變動に依つて決定せられるので無く、勞働階級が現役軍と豫備軍に分割せらるゝ比例の變動、換言すれば過剩人口の相對的範圍の增減、更に換言すれば過剩人口が産業に或は吸引せられ或は吐出せらるゝ程度に依つて決定せられるのである。從來の經濟學者の獨斷說に從へば、勞銀の生活必要費以上の騰落は勞働者の結婚を促進し、隨つて生

ずる勞働人口の絶對的增加が再度勞銀を從前の水準に低下せしむと云ふにあれども、そは大いなる錯覺である　勞銀昂騰の結果實際に勞働能力ある人口の積極的增加が實現し得る以前に產業上の戰が戰はれ、其勝敗の決せらるゝ時期は既に幾度も幾度も經過してゐるであらう。而してこは資本主義社會にのみ特有なる人口法則であつて人智の發達に伴ひ生產方法が進步するに隨つて、過去に於て變遷せると同樣に將來に於ても亦變遷す可き一の歷史的法則である。畢竟マルサス以後の正統派經濟學者の提唱するが如き抽象的絕對的人口法則は、獨り人類が有史以來干涉せざる儘の動植物に取りてのみ存在する所であつて、人類社會には實在せずと云ふのが「資本論」に現はれたる人口論議の大要である（PP. 689-700. 尙此項、小泉信三敎授「社會組織の經濟理論的批判」二六——三二頁參照）。

思ふに如上の Marx の論說は、資本主義社會に於る勞働者階級が如何に不斷に生活の不安に依つて脅威せらるゝかを遺憾無く摘發せるものである。勞働者階級が其自然的人口過增の傾向より來る生活上の壓迫を感受する以前に、既に再三資本蓄積が雇傭勞働者を呑吐する爲に一喜一憂しつゝ、所詮相擁して悲境に轉落し行く可き過程を極めて合理的に究明してゐる。假令私有財產制度是認の上に築かれたる社會組織が所謂道德的抑制の奬勵普及に若干の間接的援助を寄與するとするも、他方に於て斯の如き弊害を釀成する以上は、マルサスが之を以て最善恆久のものとして支持する論據は著しく薄弱と爲らざるを得ない　洵に Marx の資本蓄積の法則は、疑も無くマルサス「人口論」に加へられたる最も權威有る批判の一たるを失はぬ。

乍併、更に檢討を進むるに如上の批判は能くマルサスの學說を根柢より完全に潰滅せるものと云ふを得るであらう乎。そは固より痛烈なる打擊に相違無きも果して致命的の瘡痍を與へしものと許容するを得るであらう乎。明に此點に於ては不充分である。如何となれば Marx は資本主義的經濟組織に特有なる相對的人口過剩の眞相を明瞭に披瀝してはゐるが、然らば社會主義的經濟組織に於ては何に故人口と食糧の不均衡を生ずる危惧をば胚胎せざるかとの問題に關しては、徹底的の論究を缺いてゐるからである。彼は同じく其著「資本論」に於て「利潤率遞減の法則」を始め、資本主義的生產方法の發達が自縛的に資本の完全自由なる運用を阻止する所の矛盾有る事を指摘してゐる。獨り彼れのみならず、土地、資本の公有の實施せらるゝ時は其の然らざる時に比して遙に資本の利用を增大す可き事は、今日多數の學者の認容する所である。

然しそれに基く生存資料の生產額の增加が人口增加よりも尙急速に行はる可き事を論證するか、然らざれば人口增加が所謂道德的抑制の戒律を遵守する以外の、而して又マルサスの擧示せる罪惡慘禍に墮せざる、他の事情に依り制限せらる可き事を論證するにあらざる限り、マルサスの人口法則は完全に破壞せられたりとは云ひ得ない道理である。然るに Marx は此用意を怠つてゐる。尠く共論及が不充分である。既述の彼れの論說はマルサスが私有財產制度を、隨つて亦資本主義的經濟組織を恆久最善のものと固執する事に對しては有力なる非難を提示するが、人口は何等の制限無き時は之を支持す可き生存資料を凌駕して增加する所の潛在的傾向が有ると云ふマルサスの人口の原理其物に對しては、之を完膚無きまでに搏擊せるものと云ふを得ない。若し土地及び資本の公有の實現せら

る丶曉に於ても尙生存資料の生產は人口增加の速度に追隨する能はずとせば、そは偶々資本主義社會に於て其特有の歷史的人口法則の爲に背後に隱蔽せられてゐた自然的人口法則が、果然社會主義社會に於て表面に顯現し來る結果を招致する道理である。

斯の如くに論じ來れば、マルサス「人口論」の根本思想を徹底的に打破す可き論據は畢竟二途を出でない。一は積極的に科學の發達に依つて生存資料の生產が却つて人口增加の速度に凌駕し得る可能性を論證する事、他は消極的に人口の繁殖力が將來に於て減退し、隨つて人口過增の傾向を一片の杞憂に歸せしむ可き事由を生物學上より推論する事である。

十一

前世紀に於る驚嘆す可き科學の進步は熾烈なる理想主義的精神の勃興と相呼應して、功利主義經濟學と久しきに亘り形影相伴へる憂鬱なる人生觀を否定し、尠くとも經濟生活の關與する範圍に於ては圓滿無碍なる社會の到來を期望する幾多の樂觀論を輩出せしめた。

Patten は以爲らく、「羅馬ヴェニスの經濟事情の攻究を基礎に明日の經濟事情を豫言せんと欲する人々は、是れ窮乏の征服に苦鬪せる社會と、餘剩生產物の公正なる分配に全思索を集注し得るが如き良好なる狀態に置かれたる社會との相違を看過せるものである。前者に於る文明は其傳統に基き窮乏の程度を可及的最小限に食ひ止め、遂には是に打克つ事に努力しなくてはならぬ。然るに後者に於る文明は餘剩生產物を共同の福祉の爲に善用し、活力及び生產能力を減退する事無く、又寄食階級を創造する事無く却つて一般の幸福を增進し且つ將來に對して一層善良なる準備を整へるが如き方法に於て、餘剩生產物の分配を行ふ事を期するものである。即ち前の社會の典型は謂はゞ苦痛經濟若しくは窮乏經濟であり、他の社會のそれは快樂經濟若しくは餘剩經濟と稱す可きである」。人口過增論者が有力なる論據とする收穫遞減の法則は恐るゝに足りない。「人力が自然に打克つ每に社會の消費に供せらるゝ財貨の分量は增加し、之を生產するに必要なる勞働量を輕減する。一の場合には餘剩生產物は餘剩精力の形に於て個人の中に保藏せられ、他の場合にはそれは此精力に依つて生產せられたる財貨の形に於て保藏せられる。財貨は消費に依つて效用と化し效用は精力に變形せられ、精力は又勞働として更に新たなる財貨を創造する。餘剩生產物は永久資金として貯蓄せられずに、唯財貨より精力へ、精力より再び財貨へと不斷に變形せらるゝ資金としてのみ存在し成長するのである。生活、勞働、及び幸福は斯くして相互に連結せられ、其尺度は彼等に活氣を與ふる餘剩生產物である。それは吾等の祖先が常に面接し畏怖したる窮乏の脅威より現代を匡救するものである」。現存の諸般の慘禍は此期望を裏切るものと思惟するを得ない「吾人は軍國主義が漸時產業立國主義に驅逐せられつゝあるを知る、然も軍隊の權力及び能力が現今の如く强大であつた時代は未だ曾て無かつた。彼等は恰も裏面に於る其勢力の崩潰が最も顯著なる時に於て、國家を其權力の中に掌握してゐる。產業界に直接至大の關係有る禍害に就いて見るも亦是と同樣である。貧民の受くる貧困、慘禍、虐使、壓制並に富者の有する貪婪、冷酷、權勢は新たなる經濟組織の基礎が益々平明と成り行く時に於てすら、掩ふ可からざる事實である。過渡時代に於ては舊思想と新世界とが相共に併存する」。然し一旦吾等の文明の基礎

が變轉すれば、舊思想は議論に依つてゞ無く體驗に依つて徐々に消滅するであらうと（Thompson: Population, A Study in Malthusianism. PP. 30-34）。

更に Seligman は此種の樂觀思想を最も良く人口問題の論議に取り入れてゐる。曰く「マルサスの前提は或は正しく見えるかも知れぬ。加之、貧民階級に於る豫防的思慮は恐らく薄弱なるが故に、彼れの憂鬱なる豫言も亦適中したと云ひ得るやうに考へられるかも知れぬ。然しかゝる結論を導くは誤りである。眞に相對峙するものは人口と食糧では無く、人口と富、或は生産能率であると見るのが尠くとも眞理に近い。今此鬪爭――それは總ての耕作に適する土地が開拓せられた後の話であるが――が起るものと假想し、地球表面の總ての廣汎なる處女地が食糧生産に利用せらるゝ遙遠の將來に就きて考慮するも、尙富の增加は殆ど無限の期間に亘つて人口を凌駕す可しと解するが至當である。何に故ならば農業生活に於て眞の集約的資本主義的經營は、未だ曾て大規模に行はれた事は無いからである。若し土地に投資す可き充分の富有らば、それは食糧に變形せられる事が出來る。土地の收穫遞減は、一般産業の急速に增大する能率の齎らす收穫遞增の爲に阻止せられる。成る程食糧の價格は騰貴す可きも、之を購買する富は一層增加するであらう。獨り富の增加速度が迅速となり得るのみならず、富の增加其物が人口の增加率を減退する傾向ある經濟的及び社會學的諸要素を發動せしめるであらう。斯くして兩方面より富と人口との對峙は緩和せられるであらう。良好なる狀態に於ては人口は徐々に、富は急速に增加するであらう。それ故に人口過剩の學說は近代社會に於ては其恐怖を消失したのである」と（Seligman: Principles of Economics. PP. 64-66）。

斯くの如き科學至上の見地に立ちて總ての人類が尠くとも經濟的壓迫より解放せらるゝ時代の到來を主張する所論は、所謂思想の右傾せる人々の中にも亦左傾せる人々の中にも、等しく多くの擁護者を見出す事が出來る。即ち或る者は現存の社會組織を以て恒久至善と看做し、今日の諸般の害惡も人智の發達に基く財の豐饒に依つて制度の變更を待たずに匡救し得可しと思惟し、或る者は現存制度を崩潰し適正なる社會組織を代位せしむるを條件として、啻に今日の社會的不平等不公正の禍根を剔滅し得るに停まらず、進んで一切の經濟的窮乏を知らぬ樂天境を實現し得るまでに人智は既に發達せるか、或は發達す可き可能性有りと主張するのである。而して何れも共に人口の膨脹が豐饒なる生存資料の餘剩を凌駕し、之を蕩盡する程に急激に行はるゝ危惧の皆無なる事を信じ、隨つて近代的産業の現實の或は豫想的の生産力を楯に、マルサス「人口論」に對して根本的駁論を加へんとするに於ては一で有る。吾人は此駁論を如何に評價す可き乎。

十二

思ふにマルサスの見解の一弱點は、科學の進歩其物は寧ろ必然的結果として豫想し乍ら、尙其今日に見るが如き威力を完全に洞見し得なかつた事である。收穫遞減の法則に關して彼れの抱ける概念は大體に於て眞實である。然し彼は此法則を實地に應用するに就いての制限的條件を、尠くとも充分正確に重視しなかつた恨みが有る。收穫遞減の法則は反對傾向に依つて時に逆抗せられるものである。それは土地耕作上一定の限界點に達すれば、他の事情に變化無き限

り、資本及び勞働を追加する毎に、是れに對する收穫が相對的に減少する事を主張する。然し此限界點を嚴密に確定する事は至難である。且他の事情は變化無しに持續するものではない。例へば人口の增加は食糧に對する需要を高める一方に、其食糧生產の爲に一層組織的經營並に分業の擴張を可能ならしめ、其結果土地耕作に投ずる追加勞働が收穫を相對的に減少せしめずして却つて增加せしめる事も有り得る道理である。又斯かる改良せられたる耕作法は肥料或は生產要具の形態に於て資本を追加し、以て收穫の遞增を見る事も有り得可きである。或は灌漑圍繞等に要する最初の資本、勞働の失費が多額に上る關係から、或は其他の理由から豐沃の土地よりも貧瘠の土地の方が先に開拓せられ、然る後社會の發達に依り此最初の設備が一旦完成せらるゝ時は收穫は相對的に減少せずに却つて增加する事情も起り得るであらう。更に又一層進步せる耕作の階梯に於ては土地は種々の異る用途に使用せられ、或は異る作物を播種せられ、斯くて舊用途の或は舊作物の收穫ならば減少す可き所を新用途新作物の收穫は增加するに至る事も有り得るであらう。マルサスが如上の諸變化の導く效果を無視せるものと稱するは失當である。然し彼れが其效果の及ぼす範圍程度を完全に豫見し得なかつた事は慥かである」(Price: Political Economy in England. PP. 49-51)。

既に述べたる如くマルサスが食糧は算術級數を以て、換言すれば二十五年毎に最初の產額と等額だけ、增加し得るに過ぎずと云へるは、一定の生產方法を基礎としての立言と解せらる可き理由あり、其上彼は「耕作經營の改善、改良せられたる生產要具の使用は長期に亘つて收穫遞減の傾向を相殺して餘り有る可し」と云ひ、或は「我國に於ては國民產業の適當なる指導を俟たば數世紀の間現在の二倍若しくは三倍の人口を包容し得可く、然も此王國の何人も現在に優る衣食を享受するに至る可し」と云つてゐる。隨つて彼れが生存資料の生產が科學の進步に依つて激增せらるゝ所以を考慮に加へざりしものと斷ずるは疑も無く誤謬であるが、然し又一面より省察するに、彼れが人口過增の傾向より發生する禍害を排除する手段として積極的に科學の力を主張せる點は「人口論」全卷を通じて極めて稀有であり又微弱である。彼は殆ど其全主力を道德的抑制と云ふ消極的手段の勸奬に傾注してゐる。其上ゴドヰンの希求するが如き無政府共產の理想鄕は僅々三十年を出でずして物質的破綻より崩潰するで有らうと批判してゐる。是れ彼れが人類の性欲を過重視する一方に、科學の發達を豫知し乍らも尙近代產業の長足の進步を完全に洞見し能はざりし弱點を明示するものである。

前揭の Patten 及び Seligman の言辭を以て代表せしめたる科學至上論者の所論は此マルサスの弱點に對して最も傾聽す可き抗議を提示するものである。マルサスは消極的に道德的抑制を說くに强く、積極的に科學の權威を說くに弱かつた。是れに反して如上の樂觀論者は前の消極手段を無用として廢棄する代りに、後の積極手段を激勵し且つ期待するのである。故にマルサスの中庸を逸したる論點を指摘するものとしては、彼等の批判に多大の價値を認めなくてはならぬ。然し「人口は徐々に、富は急激に」增加すると云ふ良好なる狀態は恒久に持續するを得るであらう乎。人口過剩の恐怖が將來社會に再現する可能性は絕無であると裁斷し得るであらう乎。私はかゝる樂觀論の承認に躊躇を禁じ得

ざるものである。

固より前世紀に於て文明列强の人口が生存資料に對する所の壓迫は決して甚だしからず、却つて反對に人民の多數に對し其物質的幸福の上に至大なる改善の行はれたのは明白なる事實である。歐洲諸國民の消費に供せらるゝ食料の支給は、運輸並に生產方法の驚異す可き發達に依り莫大なる增加を見た。組織的經營と科學は、事實、自然の勢力に對する人間の支配力を無量に增大せしめ、爲に世界の工業國に於る人口は未曾有の比率を以て增加せるに拘らず、生存資料の生產をして人口の增加よりも遙に凌駕せしめるに至つた。然しかゝる事實は新興諸國が次第に人口を充滿し始むるに及んで、長き間に遂には世界の人口は再び生存資料の限界まで增加す可しとの論爭をそれ自ら解決するものでは無い。實際に於て既に過去數年間に於る生活費の騰貴は、世界の食糧供給問題に關し工業諸國の間に激烈なる競爭を惹起す可き前兆たるを示唆する者すら有るのである。かゝる競爭は不可抗である。自然の富源は無盡藏では無い。而して科學が爾後如何なる貢獻を爲す可き運命に在るやは固より豫知する事不可能なるも、兎に角吾人は此上如何に運輸上の革命有りとも、最早文明の範圍に招致する事の出來る溫帶には新らしき大陸の存在しない事を知つてゐる。それ故に將來に於る人類の物質的幸福が、窮極に於て一方の人口の增加と他方の富源の增加との均衡に依つて決定せらる可き事が自明の公理であると共に、此兩要素の後者が絕對に不確實なる投機的事項で有る事に留意しなくてはならぬ」（Lagton: Introduction to Malthus' Principles of Population, Everyman's Library, PP. xi-xii）。若しマルサスが近世產業發達の未充幼稚なる初期を瞥見せるが爲に、其威力を過小視する傾向を免れざりしとすれば、前揭の樂觀論者は其發達の最も驚異す可き時期に當面せるが爲に、其威力を過大視するの傾向に陷れるにあらざるかを私は疑ふものである。

十三

マルサスの學說に對する今一つの重要なる駁論は始め Spencer の唱導に依り、生物學上に論據を求むるものである。以爲らく人口の增加と個人性の發達とは反比例をなすものである。種族の進化は種の汎布或は創生を犧牲に供して行はれる。換言すれば個人が自己の個人性を發達せしむる爲に起る勢力集中の作用は、新たに他の個人を創造する力即ち蕃殖力を減退せざれば止まぬものである。隨つて文明の進步に伴ひ人口過少の現象は起り得可きも、人口過剩の危惧は消失するであらうと。

此學說を人口問題の社會學的經濟學的考察に適用せるものは Nitti の「人口と社會組織」と題する一書である。彼れに從へば「人口問題は主としてそれと密接の關係有る富の分配の見地より考察す可きものである。吾人は現存の經濟組織の下に一定の人口を包容し得る國家ならば、若し其生產する富を一層廣く分配せしむる如き經濟組織に變更する時は、遙かに多大の人口を包容し得可しと斷言する事が出來る」。「往時の飢饉は自然の意を冒瀆して、總ての座席の既に充塞せる人生の饗宴に列せんと企圖せる者に對し、自然の賦課せる恐る可き刑罰であるとマルサスは看做したが、それは吾人の先に述べたる如く市場の不備と經濟組織に起因せるものであつて毫も自然的原因に發したのでは無い」。然らば現存の分配制度を改善して人口に對する制限を解除する時は、人口は一層急激に膨脹して更

に他の制限を必要とする結果に陷らざる乎。Nitti は爰に於て前掲 Spencer の學說に憑依し文明に伴ふ個人性の發達が必然生殖力の減退を導き、隨つて人口過增よりも寧ろ人口過少の傾向を生ずる所以を力說する。然もそれは啻に將來に可能の事象たるのみならず、既に過去に實現せし所である。要するに「生殖率はマルサス及びマルサス主義者の知悉せざる法則の支配を被るものである。吾人は一國民が文化の黃金時代に達する時は富は增加し人口は稠密となり、然る後忽ち生殖の遲滯の爲に人口稀薄となり國勢の衰微を招ける事實を史上に經驗した。又他方に於て久しく未開の狀態に在りし國民が、外的原因の影響に依つて急激に人口を增加し、爲に新文明の中心となれる事實をも目視した。多くの古代文明國は侵略或は戰爭の爲で無く單に生殖率停滯の爲に沒落したのである。マルサスの人口法則は何等の眞理をも包含せず又說明してゐない。そは歷史と人口學に僞瞞せられたる融通の利かぬ方式に拘束せられて、獨り貧困の神秘のみならず又人類文明の或は興隆し或は衰替する逆轉作用をば說明し得ざるものであると云ふのである」(Thompson: Population, A Study in Malthusianism. PP. 28-29)。

今經濟組織の革新を行ひ分配制度を改善する時は、生產機關の發達並に經營技術の進步著しき現代文明諸國が一層多數の人口に平均的に一層向上せる衣食住を供給し得可きは異論無き所である。乍併、個人性の發達其物が將して生物學上の必然的法則に依り生殖力を減退するであらう乎。

試に此點に於る Kautsky の觀察を參照するは興味多い。彼は資本主義社會に於ては最も發達せる生產方法を農業上に充分に利用するを得ざる諸種の障碍有るを述べ、次で社會主義社會の實現を見る時は是等の障碍が一切排除せらるゝに依り收穫は遙に豐饒となり、尠くとも向後百年間は如何に急速に人口が增加するとも尙人口過剩と云ふが如き憂懼の絕對に發生せざる可きを豫言してゐる。即ち經濟組織の變更に依り人口過增の禍害を防遏し得可しと思惟する點に於て Nitti と其見解を一にするものである。然し彼れが百年と計上せる一定期間を經由せる後には、或は人口過剩の、或は人口過少の憂懼が交々發生する可能性があると想像してゐる。其人口過剩の憂懼を豫想する所以は彼れが「窮困、憂苦、過勞は生殖力を高め、富裕、安樂、短き勞働時間は之を低下せしめると云ふ多くの社會主義者等の見解」に反對し、社會主義社會に於ては死亡率の減少、晩婚の經濟的理由の消滅、賣春斷絕に依り花柳病に依る不姙原因の撤去等の爲め却つて大いに人口增殖を助成する事情有りと思惟する故である。其人口過少の憂懼を豫想する所以は社會主義社會に於ては婦人の向上は其眼界及び活動の範圍を擴大し、隨つて婦人をして多產を嫌忌するに至らしめ、其自然的生殖力の增加にも拘らず避姙法の採用に依り人口增加の趨勢を或は緩漫或は停止せしむるに至るやも知れずと思惟せる故である（小泉信三敎授「社會組織の經濟理論的批判」、三六－三九頁に據る）。即ち Kautsky は Nitti とは正反對に文化の進展に伴ふ個人性の發達が生殖力を減退すると云ふ見解を拒否し、却つて經濟組織の改善に依り社會成員の文化生活を一般に向上せしむる時は、一世紀の後には或は人口過剩の傾向に陷る可きを豫想し、又逆に人口過少の傾向に逸する場合ありとも、そは一部の生物學者の示唆する如く自然的生殖力の低下に基くにあらずし

て人爲的生殖回避に起因す可しと思惟するものである。兩者の見解を比較するに私は、他の所說は暫く措き此論點の關する限りに於ては、Kautsky に左袒するを辭せざるものである。蓋し人類の生殖力と個人性の發達とが相反撥すると云ふ考察は、未だ充分なる歷史的吟味を濾過してゐない。古代文明諸國の沒落が各自の文化全盛期以後の生殖停滯に起因せる事を事實と假定するも、其生殖停滯其物は決して內部的必然的に國民の生殖力が減退せるが爲にあらずして奢侈、淫佚、向上欲其他の外部的人爲的諸原因が多產を嫌忌せしめたる爲と解するが恐らく正鵠を穿つに近いであらう。例へば戰前佛蘭西に獨自の現象たりし人口低減が必ずしも同國文化の世界最高に位する反映たるにあらず、却つて過度の人工的產兒制限の偶々招致せる弊竇と看做されしは、如上の解釋を正當化するものでは無い乎。隨つて將來に於ても亦人類は自らの進化の過程に於て、生理的に種の創生力を弱めらるゝ事よりも、寧ろ自發的意志の作用に依り人口過增の趨勢を防遏す可しとの推論を當然導くものである。

以上私は Spencer 或は Nitti の豫見を拒否する爲に Kautsky の豫見を以て是に對照せしめたが、然らば Kausky の豫見其物はマルサスの學說に對して如何なる關係に立てるかと云ふに、兩者の見解は決して栓納相容れざるものでは無い。蓋し前者が憂惧の一たる人口過剩の傾向は固より後者の力說する所であり、其憂惧の二たる人口過少の傾向は、人工避姙に起因すと思惟するものなるに依り、此點に於ても亦「人爲的制限手段が全然人口の發達を阻害する所の反對の過誤に陷り易き」事を豫言せる後者の見解と二致無きものと云はざるを得ない。而して

Kausky は人口過少の場合には社會的道德は無產兒性交を非難し其普及を防止す可しと云ふのであるが、こは「地球を人類を以て充滿せんと欲するは、造物主の目的なりと思惟せざるを得ず」ゞの自然神敎を遵奉せるマルサスの固より拒否する所にあらざる可く、又人口過增の場合には社會道德は多產抑制の義務を賦課す可しと云ふのであるが、其抑制の手段として無產兒性交即ち人工避姙を是認するか否認するかの倫理的判斷は別として、社會一般の福祉の爲に其成員の性的抑制の義務を認むる根本の見解は又マルサスと其軌を一にせるものである。畢竟社會主義社會に於ても人口過增の自然的傾向は消滅せず、之を罪惡慘禍の發生無しに制限するが爲にはマルサスの所謂道德的抑制に依るか、或はマルサスの罪惡と認め新マルサス主義の正當と認むる他の手段に依るか、二者其一を出でずと

の結論に歸着する。隨つて Nitti と云ひ Kautsky と云ひ經濟組織の變更を高調する論旨には讃同し得るも、尙マルサス「人口論」の根幹たる人口の原理其物に對しては完全なる反駁を加ふるに成功せるものと許容するを得ないのである。若しそれ人工避姙是非に至りては、假令社會主義社會に於ても人口過增を防遏せんとして却つて諸種の性的惰落を誘致し、反對害惡を助成する憂惧の一掃せられざる以上、遽に之を是認するを得ない。文化の進展に伴ひ道德的抑制の意義は、寧ろ次に述ぶる生活水準の一般的向上の爲に必然修訂を蒙る可きものである。

十四

マルサスは所謂生存資料なるものが、生活程度の高低に應じて其質量を變ずる事實に就き儼正なる省察を缺如してゐた「或る時には彼は恰もそれが全く生命を辛うじて維持するに必要な

る一定量の資料に過ぎざるかの如くに限局し、又他の時には自己の階級及び種姓 Status に關する配慮並に其子女の教育に關する配慮等を生存資料中に包含せしめてゐる。彼は或る頁に於ては「社會の下層階級の安樂は單に食糧のみに依るにあらず否其他の嚴密なる必需品のみに依るにもあらず」と云ひ、又他の頁に於ては「社會的地位の兩三歩の降下も、特にそれが教育が終熄し無智が開始する梯に停まる時には、人民一般より幻想的害惡で無く實際的害惡であると看做されるであらう」と云つてゐる（Price: Political Econonny in England. P. 58）。此不徹底なる見解の爲に彼は道德的抑制を實行す可き生活最低限度と、肉體を維持す可き生活最低減度との區別に關して明確なる觀念を逸してゐた。

此點を痛擊せるものは Bagehot である。曰く「民衆の安樂の增加は必ずしも其人口を增加しない。その此事あるは唯二個の場合のみ。第一は彼等が肉體的生活最低限度、換言すれば漸やく生命を維持するに足る程度に停まり然も自制を實行せざる場合である。此瞬間に於て食糧增加せば人口も隨つて增加するであらう。第二は彼等が道德的生活最低限度、換言すれば丁度現存人口を彼等が適當と思惟する生活樣式に於て——其樣式の高下は兎に角——支持するに足る狀態に在り、且つ該人口は自制に依つて抑制せられ然も彼等の生活低度を變更せざる場合である。此時に於ては疑も無く享樂の增進は產兒の增加となり、須臾にして新狀態は舊狀態以上の安樂を各個人に寄與する事無く、唯舊來の安樂を享受する所の人口を增加せるのみとなるであらう。然し此事情は必然的に起るものでは無い。何に故とならば、道德的生活最低限度は洵に可變性のものであるからである。民衆は其生活程度を變更するやも知る可からず、然らば安樂の增加も人口の增加を隨伴しないであらう。人口は從前通りに停まり、唯各個人が平均的に生活の改善を得るであらう。一國民が二者何れの道を撰ぶかは此生活程度の變更如何に懸り、且つ彼等の享樂する文化の種類如何に關聯するものである。余は是に關する一般的方式を發見し得るや否やを疑ふ。或る著作家連は一世代全般を一時に向上せしむる偉大なる突發的變化は、經續的小變化の一連よりも一層民衆の生活低度を昂進せしめ易いと云つたが、余の判斷し得る限りに於ては寧ろ民衆の前以ての用意が肝要である。克己に馴れたる眞に節儉的の國民は、微少の改善の連續に依つて利する所絕大である。彼等は其人口を急增せず、其幸福を增進する。是に反して浮華逸樂の國民は如何に偉大なる又突發的なる天惠に依つて巨富を得るとも、概して善化せざるものである。彼等は同一の平準に生活し、而して其平準は向上しないであらう」と（Bagehot: Economic Studies. PP. 146-147）

特に如上の非難はマルサスの學說を基礎に提唱せられたる勞銀鐵則說の虛妄が、現實の事象に照破せらるゝに及んで一層熾烈を加へたのである。洵に生活の平準は假令一國內の階級差別を撤廢するとも、國民と國民とに依る高低は尙存し、更に又時代より時代へ、世代より世代へと文化の進展に伴ひ向上の趨勢あるは固より、過去に於ても着々向上し來れるは明白なる事實である。隨つて道德的生活最低限度なるものが、文化の程度に對應して伸縮す可きは必然である。マルサスが此事理を全然無視せざるまでも甚だ輕視せるは爭ふ可からざる缺陷であつた。私は Bagehot の非難に同意するを憚らぬ。乍併、是が爲にマルサスの根本思想が振撼せらる

ものと思惟するは許容し難き謬見である。蓋し道德的生活最低限度の轉位と、道德的抑制其物の存在乃至必要とは、明確に區別するを要する別個の概念である。前者が各國各時代の文化に順應して伸縮異同有る事は、後者が何日かは發生乃至要望せらる可き普遍性を毫末も裏切るものでは無い。否寧ろ生活水準にして向上すれば、他の事情に變化無き限り、人口が此向上せる生活水準を維持するに必要なる資料を凌駕して增殖す可き潛在的傾向は一層顯著となるの道理である。故に Marshall はマルサスの豫見し得ざりし前世紀の驚異す可き科學の發達に依つて、西歐諸國の生活水準が著しく向上せるを認容せるに拘らず、尙マルサスの人口の原理の根幹は不朽の眞理であり、且つ是に附隨する論議も其形態の古びたるのみにて其本質は依然多大の堅實性を保有せるものと斷言してゐる。曰く「十九世紀の末葉に於て强行せられたる人口膨脹に對する諸種の制限が（其樣式は固より未開の場所に於ては變化する）、一般的に增加せざる限り、現在西歐諸國に普及せる安慰なる生活が全世界に傳播し且つ數百年に亘りて之を持續する事の不可能なる可きは今に於ても尙眞理である」と（Marshall: Principles of Economics, 6th ed. P. 180.）。文化の進展は生產技術の發達に依つて、一方に人口過增の趨勢に逆抗するが、同時に生活水準の向上に依つて、他方に之を擴大する。然も既述の如く生存資料が人口を壓倒して激增するが如き良好なる狀態は、假令或る期間經續するとも所詮恒久的現象とは樂觀し難き事情がある。故に省察を單に此良好なる有限期間に限局せず、又天變戰亂等の偶時的影響を度外視する時はマルサスの所論は依然として眞實である。即ち文化の發達或は經濟組織の變更に依つて現在以上に進に人類の幸福の增進せらるゝ社會を假想するも、尙此增進せられたる幸福を持久せんが爲には、其改善向上したる生活水準を中心として道德的抑制の必要を再現するに至るであらう。

斯の如くに論じ來ればマルサスの「人口論」たる、其時人後人に依つて多種多樣の辯難搏擊の標的となれるも、尙其根本思想は一片不易の眞理を包藏するの概がある。人若し彼れの學說の重點を現存經濟組織の擁護に在りと看做さば、當然不朽の價値を是に許容するを得ないであらう。然し若し彼れの學說の眞髓を人口過增の潛在的傾向に在りと看做さば、敢て絕大の價値を是に賦與するに躊躇しないであらう。然らばゴドヰンとマルサスと往年相對峙せる論爭は現代に如何なる意義を保持する乎。兩者の對照を以て冒頭を起筆せる本稿は又兩者の對照を以て結論に代へねばならぬ。

十五

Leslie Stephen はゴドヰンを目して、十八世紀に生き而して十九世紀には唯だ生き殘りしのみ」と評したが、私は更に彼は二十世紀に於て甦生せるものと言ひ度い。固より放縱不羈の空想的情感より奔出せる其理想鄕は、到底現代人の其儘に受容し能はざる所なるも、尙因襲の繫縛より逃れて新社會の建設を翹望する熱烈なる革命的精神は、駸々たる科學的進步及び經濟事情の發展と相呼應して一層合理的なる各派の社會運動を輩出せしめた。ゴドヰンに對峙しマルサスの主張せる現存社會制度擁護の論據は到底今日に於ては支持するを得ない。

第一にゴドヰンが現在の一切諸惡を專ら制度組織の責に歸するに對し、マルサスが全然個人の罪に歸する見解の正邪は Marx の「資本論」

が明確に決定してゐる。資本主義社會に特有なる歴史的人口法則の爲に、自然的人口法則の作用以前に早く勞働者が不斷の不安に脅威せらるゝ事、即ち彼等の貧窮が彼等の左右し得る以外の社會的原因に其大部分を負ふ事は、多數の人々の認容する所である。

第二に右と關聯してマルサスが道德的抑制を貧者のみの戒律に歸する不公正、及び經濟的にも時間的にも品性を淘冶する餘裕無き彼等に、之を强請するの不可能なる所以も亦衆目の一致する所である。

第三にマルサスの基本的倫理觀たる功利主義哲學に照應するも、彼れの改革否認論は當然崩潰しなければならぬ。彼は「最大多數」なる觀念よりも寧ろ「最大幸福」なる觀念を重視し、社會主義的社會に於ては多數者の平均的幸福を增進す可きも現在の富裕者の强烈なる幸福が減退す可しとの論據を第一とし、次にそれは多數者相率ゐて窮乏に陷る誘因たる可しとの論據を第二として、飽くまでも革新論議を拒否してゐる。乍併、斯の如きは下層階級民の少數なる時代並に貧富の懸隔の輕微なる時代にのみ適合す可き所論である。現代は却つて「最大幸福」なる觀念よりも「最大多數」なる觀念に重きを置き、且つ少數富者の巨富を以て多數貧者の痛苦を匡救するのが、姑息ではあるが寧ろ功利の原理には妥つてゐる　他方に於てマルサスは何等罪惡慘禍を伴はざる健全合法なる人口增加は自ら觀迎する所と爲し、又人口の刺戟に基く科學の進歩を認めてゐる。然るに今 Marx 或は Kausky 等の證明に依れば現存經濟組織は科學の權威の圓滿なる發揮を阻害し、且つ社會主義社會に進化する時は何等の罪惡慘禍を見ずに、却つて大多數の人々に現在以上の幸福を賦與しつゝ人口增加を支持するを得可しと云ふのである。然らば畢竟現在の資本主義經濟組織は、消極的意味に於ては多數が多量の不幸を甘受し、積極的意味に於ては一層多數の人々に一層多量の幸福を給付し得る可能的機會を故意に逸するものである。そは兩面より二重の意味に於て功利の原理、即ち可及的多數の人口が可及的多量の幸福を享受するを以て至上最善の理想を爲す倫理觀に背戻するものと云はねばならぬ。隨つて同一の該原理より出發せるマルサスの社會觀は現代に適合せざる一方ゴドヰンのそれは傾聽に價するものがある。

最後に其是非の批判は暫く措いて、今日無政府共產主義的社會の樹立を翹望するは、ゴドヰンやマルサスの時代に於て之を翹望する程に架空の幻想では無い。純正マルクス學派の嫡流、或は自ら之を標榜する亞流が、政府無き共產の狀態を究竟の理想と爲すは學徒の周知する所である。而して更に此絕對境に到達す可き中間階梯たる集產主義的社會の一變態が、或る者には蛇蝎視せられ或る者には祝福せられつゝ今や全世界環視の中に勇敢なる試練の門途に上れるは明白なる現實の事實なのである。ゴドヰンの希求する如き理想鄕は人口法則の作用に依つて三十年を出でずして倒潰す可しとのマルサスの所說は Kausky 其他の科學的攻究に依つて裏切られ、却つて「遙遠なる將來の危惧を慮りて今日人類に利益有る制度を敢て回避するは迂愚の極みなり」と云ふゴドヰンの所言は數多の共鳴者を現代に見出すに至つた。

乍併爰に銘記す可きは以上の縷述は、畢竟マルサスが現存社會制度を恒久至善のものと看做せる點に關する批判に停まる事である。一旦省察を彼れの人口の原理其物に轉換する時は、私

は依然それが赫燿たる眞理を包含せるものと思惟せざるを得ない。如何に驚異に價する物質文明の進展を見るも社會各員の道德的自覺の協力無しには完全なる福祉を享樂するは蓋し不可能であらう。假令社會主義社會に於ても人口が生存資料を凌駕して增加す可き潛在的傾向は、必然人類の經濟的發達を刺戟する一方、其道德的自制心を提醒する所の力强き誘因たる可きを永久に改めないであらう。先づゴドヰンの理想を生かし然る後にマルサスの說話に聽く。此意味に於て現代は往年相拮抗せる兩思想家の精神に或る階調を保たしむる所に、新たなる向上の一路を見出さんとする傾向を有するものではあるまい乎。

然らば假に社會主義社會の實現を想定して、吾人は其處にマルサスの所謂道德的抑制の圓滿なる發揮を期待し得可きや否や。私は是に關する論斷を回避し度いと思ふ。蓋し人性は所詮環境の支配を免れぬ。故に現存社會制度の下に離覲する人間の頭腦を以て、當來社會に於る人間の性情を類推せんと欲するは不合理であるからである。唯だ其曉に於ても、社會全般の福祉の爲に道德的抑制が決して全然無用の說法に歸せざる可きは想像に難くない。而して其然る限り「人口論」並に其著者の名辭も亦永久に傳承せられるであらう。私は然く確信して疑はざるものである。（完）

基督教義と羅馬法理（上）

―聖トマスの徵利論に關する考察の中―

打村鑛三

一

洵に原始の基督教は、あらゆる智識的優越や、道德的優越や、世間的優越を撤せる純なる心情の宗教であつた。けれどもこれが西羅馬帝國崩壞後の世界を承繼して俗界の支配權をも、侵入蠻族の間に自然に贏ち得るやうになつてからは、そう何時までも他界主義を持するわけにはゆかなかつた。かくて中世精神の目的とするところは、六合(the world)を三寶(clersical interests)に奉仕せしむるにあつた。敎會利子禁止論にも亦この特徵を見ることが出來る。而して敎會はその立場より、ひたぶるに禁止の爲に奮鬪したのであるが、これに合理的援助を與えたのは、スコラ哲學であつた。

神のものは神に歸し、カイゼルのものはカイゼルに歸せんとした基督敎は、また哲學とも他人であつた。げに哲學は希臘の病氣である「アテネとエルサレム、アカデミーと敎會、異端者と信徒との間に何の交渉があらう」。然しこの排斥は、全然貫徹されたのではなくて、かく叫んだテリトリアヌスさえも、全然哲學を拾てたのではなくて、軈てこの兩者はお互に接近して來たのであつた。この表れが所謂敎父哲學である。而してこの間、敎會の敎義は漸くその體を成したのであつて、この出來上つた敎義を論證するのは、次に出たスコラ哲學の任務であつた。基督敎的哲學はスコラ哲學に大成し、これは中世の哲學、敎會の學問となつたのである。(1)

Aquino の伯にして Loretto 及び Baleatrs の領主たる、Loudolf の子 Thomas Aquinas (1227-1274) も、實に大神學者たるのかたはら、スコラティズムの碩學であつた。彼に於て最高な

(註一) 以上の記述は主として、J. D. Erdmann, A History of Philosophy, 3 vols., 1893; Geschichte der Philosophie 2 A. 1900; 安倍能成、西洋古代中世哲學史、各スコラ哲學の條を參考したり。